

駅名変更によせて

— 「松原団地」から「獨協大学〈草加松原〉」へ —

岡村 圭子

1. 駅名変更までの道のり
2. 「団地」イメージをめぐって
3. おしゃれな団地ライフ
4. さようなら「松原団地」駅

1. 駅名変更までの道のり

2017年4月、大学の最寄駅が「松原団地」から「獨協大学前〈草加松原〉」に改称した。その前年の6月22日、東武鉄道の公式ウェブサイトには、東武鉄道株式会社、草加市、松原団地駅名変更協議会の連名で、つぎのような文書が発表された¹。駅名変更に至る経緯とその理由が説明されているので、すこし長くなるが、記録として引用しておこう。

東武鉄道（本社：東京都墨田区）では、2017年春に東武スカイツリーライン松原団地駅（所在地：埼玉県草加市）の駅名を「獨協大学前〈草加松原〉」に改称します。松原団地駅は、1962年に建設され、当時“東洋最大規模のマンモス団地”と言われた松原団地の最寄駅として、同年12月1日に開業しました。その後、1964年に獨協大学が開学し、各種文化施設が整備され、文化都市として発展し、現在も多くのお客さまにご利用いただいております。

このようななか、埼玉県草加市では、現在、独立行政法人都市再生機構（UR）による「松原団地」の建て替えおよび市街地の整備が進展していること、2014年3月に旧日光街道の「草加松原」が国指定の名勝地“おくのほそ道の風景地”となったこと等から、草加商工会議所を中心に、「松原団地駅名変更協議会」が設立され、今般、草加市及び同協議会の連名で当社に対し、「松原団地」の駅名

を「獨協大学前〈草加松原〉」に変更して欲しい旨の要望が提出されました。

当社としても、開学以降、地域と歴史を重ねてきた「獨協大学」を駅名とすることで、「大学のあるまち」を想起させ、地域のイメージアップを図れるとともに、副駅名として国指定の名勝地「草加松原」を採用することで、観光地としてのPRにもつながることから、駅名を改称することといたしました。

今後も当社では、地域とともに沿線価値向上を目指してまいります。

東武鉄道が松原団地駅近辺の「路線価値向上をめざす」動きを見せたのは、ここ数年のことと見る向きもある。大学では、2004年ごろ（梶山学長）から草加市や東武鉄道など各方面に駅名変更を働きかけてきた。この件に関わった大学教職員によれば、当時は、駅名に大学名を入れることを東武鉄道のある役員に打診したところまったく相手にされなかったという。さらに、変更を望む1万人の署名をもって草加市に要望を伝えたものの、周辺住民を中心に市民の猛烈な反対にあい、計画は頓挫。その後、2012年ごろ（犬井正学長）になって、ようやく動き出した。

1 <http://www.tobu.co.jp/file/pdf/bd94d513c99efcc66ac4ccc2d45137ee/160622.pdf?date=20160622124503>（2018年3月1日閲覧）

駅名変更に至る経緯の詳細については、獨協大学『学報』（2018年3月）および、松澤知也ほか「地域交流における大学の役割～駅名変更をきっかけとして～」（2017年度第45回学生懸賞論文最優秀賞）にあるので、本稿ではここまでとしよう。

ところで、新駅名に使用されている「獨」の字であるが、一部報道機関や道路標識では「独協」と表記していることがある。改称後の駅名に旧字体の「獨」が使用されていることについて、『団地の空間政治学』や『滝山コミュニケーション』などの著作がある政治学者の原武史はTwitter（2016年6月22日）で、団地の名前が入った駅名がなくなるとともに、旧字体を駅名に使用することも「衝撃」だとコメントしている。

2. 「団地」イメージをめぐる

若々しい大学の街のイメージを打ち出し、路線価をすこしでも上げたいひとびとにとっては、駅名変更は好ましく受け止められた。しかしながら、旧草加松原団地以下、松原団地の元住民や、建て替え後も住み続けているひと、団地に愛着をもつひとたちにとっては、寂しい出来事でもあったようだ。

松原団地に居住していない草加市民からすると、駅名変更は歓迎すべき出来事として語られることが多い。筆者も実際につきのような市民の声を耳にした。

小さい頃に草加市に転居してきた女性（20代）は、「団地に住んでないのに、（最寄駅が）松原団地っていうと、友達とかに「団地に住んでんの？」って聞かれてすごい嫌だった」と語り、駅ちかくの子育て支援センターを利用していた母親（30代）も、「松原団地はもうないのに駅名が“団地”は変ですよね」と苦笑した。また、10年ほど前、授業の一環として新入生を団地散歩に連れ出した時は、建て替え準備に入っていた時期だったからか、人の往来もほとんどなく、「マジこわくない？」「（幽霊が）出そ

う……」などという声がちらほらと聞こえてきた。団地に対するネガティブな評価は、いくつかの映画作品にもみられる²。新藤兼人が脚本を担当した『しとやかな獣』（1962年公開、大映）では、「小鳥じゃあるまいし、こんなせまっくるしいところ、毎日じっとしておれっかい」という台詞のなかで、団地は「鳥かご」にたとえられる。『団地妻：昼下がりの情事』（1971年公開、日活）では、「毎日毎日こんなコンクリートの箱の中で同じことのくりかえし！」と主人公が夫に不満をぶちまける。山田洋次監督『下町の太陽』（1963年公開、松竹）の主人公に至っては、「日当りのいい団地」での新婚生活よりも、工場の煙で昼間でも薄暗い下町での生活のほうがいいと言ってプロポーズを断ってしまう。ともかく散々な言われようである。ところが、現代的な感覚とでもいえようか、『ピカ☆ンチ』（2002年公開、ジェイ・ストーム）では、誇張されてはいるものの、マンモス団地で育った若者のゲメインシャフト的なつながりが温かい絆として（しばしば自虐的にはあるが）コメディタッチで描かれている。

2 詳細は、拙稿「記号としての団地」『地域総合研究』第2号、2009年。

さらに、新聞やテレビなどのマスメディアで語られる団地イメージもネガティブなものであることが多い。

2017年12月3日の朝日新聞を開くと、2面に「ニュータウン 夢見た先に 高齢化率42% 独居83歳「死んだら早く見つけて」という、背筋が凍るような見出しが目に飛び込んでくる。同様に、孤独死を特集した報道番組でも、団地が取り上げられる³。しかし、冷静に考えてみれば、高齢化や孤独死は現在の日本社会全体が抱える問題である。この記事のなかで、住宅政策を専門とする平山洋介もコメントしているように、これはニュータウンだけの現象ではなく、タワーマンションやバブル期に開発された住宅地でも起きることなのである⁴。

一方、団地のイメージがどうであれ、そこを生活の場にしてきた、そしてこれからも生活していくひとたちにとっては、駅名変更はかならずしも嬉しい出来事ではなかった。

1970年代から現在まで松原団地（現コンフォール松原）に居住し続けてきた男性（60代）は、「大学さんとしては大学名がつくのは嬉しいでしょうけど、われわれは、やっぱりね・・・獨協の先生を目の前にしては言いにくいんだけど」と言葉を濁しながら、駅名変更に対する複雑な思いを吐露した。

原武史は、この駅名変更について、エッセイでつぎのように述べている。

「なぜ「団地」だけが忌避されるのか。確かに団地のイメージはよくないかもしれないが、だからと言って「大学」のイメージがよいわけてもない。（略）それなのに、駅名に「大学」を付けたがるのは、高齢者しか住んでいないイメージの付きまとう「団地」よりも、若者が多く利用しているイメージが付く「大学」の方がよいと判断するからだろう。だが、私自身が再三触れているように、団地はまさに今変わろうとしている。」（『本』2016年9月号、pp.24-25）。

団地をめぐるさまざまな変化について、原はUR都市機構（旧日本住宅公団）の試行錯誤が若い世代の団地回帰を促している現状を指摘しつつ、将来的に住環境としての「団地」およびその呼び方に愛着を持つ住民がでてくる可能性を示唆し、「今の住民の声だけを根拠に」駅名を変更する／しないということが「はたして望ましいのか」と疑問を呈している。

これは、わたしたちの生活環境（わたしたちの場所）を長期的視野に立って考える上で、きわめて重要な問いかけではないだろうか。まさに原が指摘するように、生活圏としての街は「今の」住民だけのものではない。そもそも街（町）についてのイシューは、数年単位で考えるものではなく、まして経済合理性の論理だけで結論を出していいはずはない。

3. おしゃれな団地ライフ

近年の「団地ライフ」は、かつてのキラキラした感じとは別の輝きを放っている。古い団地の物件を上手に自分らしくリノベーションして住むことが「おしゃれ」という感覚がその背後に見え隠れする。

一般的な不動産屋では「拾いきれないような」個

性的な物件の魅力を掘りおこし、それを紹介する東京R不動産は、団地リノベーションをテーマにした書籍も発行している（『団地に住もう東京R不動産』2012年など）。さらに、『団地リノベ暮らし』（アトリエコチ編、2013年）では、「いま、団地は「住み

3 2013年ごろに筆者が行った松原団地住民へのインタビューの対象者のなかには、夕方のニュース番組の孤独死特集に松原団地が取り上げられたことに対し、怒りをあらわにする（繰り返しそのことについて語る）住民がいた。彼女は「やめてほしいのよ、孤独死、孤独死って、団地とりあげるの！」と語気を荒げつつ、孤独死のケースで多いのは、入居して日が浅い（数年）の独身者であることを強調していた。

4 だからこそ、松原団地でも「見守りネットワーク」や「野ばら会」が活動し、それなりの成果をあげていた。野ばら会の活動については、拙稿「『野ばら会』の歩みとこれから—山本洋子さんに聞く—」『地域総合研究』第8号（2015年）を参照。

ごろ」を迎えています。」と題して、「さまざまな事情で団地を購入し、自分たちの暮らし方に合わせて改装をして、上質な生活を送っている人たちの住まい」を紹介している。団地居住者の例として、「本好きの家主と書道教師の妻が2人で暮らす」「工業デザイナーと猫一匹のゆったりとした暮らし」「男1人のきままな住まい」などが目次にずらっと並んでいる。

2011年、筆者は当地域研のメンバーとともに、リノベーションした旧多摩平団地を視察したが、想像していた以上に内装がスタイリッシュで、利便性も考えられ、それでいてきちんとプライバシーにも配慮された住居だったことが印象に残っている⁵。ただし、それは明らかに1960年代の団地のイメージとは違う魅力がある。比較的所得の高い標準世帯（夫婦と子供2人によって構成される世帯）が暮らす最

先端の集合住宅というより、さまざまな属性の居住者がそれぞれのライフスタイルに合った間取りを楽しみながら生活するようなイメージである。

「団地リノベ暮らし」が紹介するリノベーションした団地に住むひとの例は、まさにそのイメージに合致したものとなっている。

もちろん、これらはあくまでも「イメージ」であることは否めないが、そのイメージが不動産価値（さらには路線価）を決める要素のひとつであるとするならば、こうしたイメージの変化をないがしろにすることはできない。

このような団地イメージをめぐる大きな変化は特殊なケースかもしれない。しかし、今後、団地に居住すること、さらには団地のある町に住むことは、憧れとまではいかないまでも、少なくともネガティブなイメージだけに染められることはないだろう。

4. さようなら「松原団地」駅

すでに駅名が改称された現在、筆者ができることは「松原団地駅」時代の駅の姿をなるべく記録に残し、発表することである。

まずは、松原団地自治会が発行する『会報まつばら』に掲載された、駅名変更に関する記事を見てみよう。2017年3月20日（第648号）には「駅名変更 カウントダウン始まる」という見出しの下に、1963年、1967年に撮影された松原団地駅の写真が掲載された（記事1）。さらに、同年4月20日（第649号）では、駅名変更の記念式典（2017年4月1日）の様子（撮影者は小林光雄さん）が1枚掲載されている（記事2）。

駅名変更の2017年4月1日が目前にせまった3月25日、筆者のゼミの学生と卒業生が松原団地駅に集まった。「松原団地」駅とのお別れ記念撮影会である（写真1と2）。日常の記憶を記録すること。それは、しているようでしていない、簡単なようで難

しいことである。このことに気づいたのは8年ほど前であるが⁶、まさに今回の駅名変更は、学生共々「記録」の大切さを学ぶ絶好の機会であった。

駅名変更前夜、電光掲示板には「ありがとう松原団地駅」という文字が流れていた。撮影者は、2017年3月31日の夕刻、「あっ！そうだ」と思って咄嗟に撮影したのだという（写真3）。

さて、以下では松原団地駅が現在の高架になる前の様子を中心に、過去の記録写真を見ていこう。これから紹介する写真4から11までは、松原団地自治会の元会長であり、長年にわたって松原団地とその周辺の風景を写真に収めてきた小柳青^{しん}さんによる撮影で、今回、その膨大な資料を快く提供してくださった。それらは、時系列できれいに整理されており、松原団地の記録としての価値はいうまでもなく、1970年代、80年代の庶民の生活の記録としてもたいへん資料価値の高いものであった。

5 詳細は、「東京都日野市「多摩の森」視察会報告」【地域総合研究】第5号。

6 本誌第3号、「地域の記憶を記録する」pp.71-96ページ参照。



写真1 松原団地駅構内の駅名の表示
(2017年3月25日)

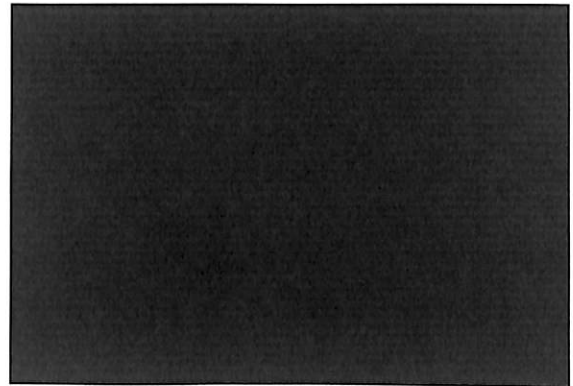


写真2 松原団地駅西口にて記念撮影
(2017年3月25日)



写真3 駅名変更前夜の松原団地駅改札口の電光掲示板
(2017年3月31日、片柳延子さん撮影)



写真4 赤い鉄骨の屋根がホーム
(1988年10月15日)

写真4と5には、1988年10月15日、高架複々線工事中の松原団地駅の様子が記録されている。

この工事が行われる前は、松原団地西口広場は、阿波踊り（写真6）や草加市立栄中学校野球部の関東大会優勝のセレモニー（1976年8月）が行われるなど、松原団地駅西口広場はさまざまな催し物の会場として利用されていた。

すこし時代をさかのぼって、現在ではあまり目にしなくなったストライキの時の駅の様子を記録した写真もある。1970年4月30日、朝から私鉄がストを執行していた。写真7では、「スト執行中」の手書きの立て看板がどしりとその存在感を示している。構内の時計から察するに撮影時間は朝の9時8分ごろだろうか。普段であれば、通勤通学客で賑わう駅の改札がしんと静まりかえっているのがわかる。プラットフォームにも人影はない（写真8）。

つぎに紹介したいのは、放置自転車問題に関する記録である。写真9と10は1978年6月5日に撮影された駅前（西口と東口）の放置自転車の様子である。写真11は、同年6月17日に撮影された放置自転車撤去後の様子である。放置自転車をめぐっては、現在も頭を悩ませている自治体が少なくない。東口バス停を飲み込むかのような自転車の海には唖然とさせられる（写真10）。奥に自転車を停めたひとは、戻ってきたときに無事に自転車を出せたのだろうか？撤去後は、ござっぱりした西口広場になった（写真11）。

詳しい日時は不明だが、1976年ごろ駅前の東武ストアを撮影したカラー写真（写真12）からも、やはり自転車が様々な方向で停められているのがわかる。

最後に、松原団地入居開始直後の松原団地駅（西口）の様子を伝える写真を2点、紹介したい⁷。写真13は、1969年、松原団地入居直後の新婚夫婦の仲睦まじい様子が微笑ましい。背後に写っているのが、高架になる前の松原団地駅である。駅前で買い物できるところが東武ストア（写真14）以外には無く、現在のように深夜営業もしていなかったため、働く

主婦にとって買い物は一苦勞だったと写真提供者の片柳さんはいう。

50年という歳月の記録を、すべてここに収めることはできないが、松原団地駅（およびその周辺）に関連した写真のほんの一部を紹介してきた。これから獨協大学に入学する学生やこの近辺に転居してきたばかりのひとにとっては、「獨協大学前〈草加松原〉」駅があたりまえの光景になるだろう。これから50年後、どのように風景が変わっていくのだろうか。



写真5 松原団地駅西口
(1988年10月15日)



写真6 高円寺葵新連の阿波踊り
(1975年8月)



写真7 「スト執行中」の看板が立つ松原団地駅改札
(1970年4月30日)

⁷ 写真12から14は、片柳延子さんからの提供。



写真8 誰もいない松原団地駅プラットフォーム
(1970年4月30日)



写真9 松原団地駅西口の放置自転車
(1978年6月5日)



写真10 松原団地駅東口の放置自転車
(1978年6月5日)



写真11 松原団地駅西口、放置自転車撤去後の状況
(1978年6月17日)



写真12 (1976年ごろ)

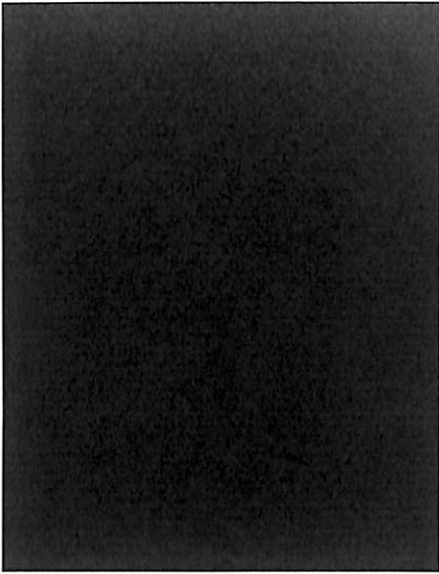


写真13 (1969年)

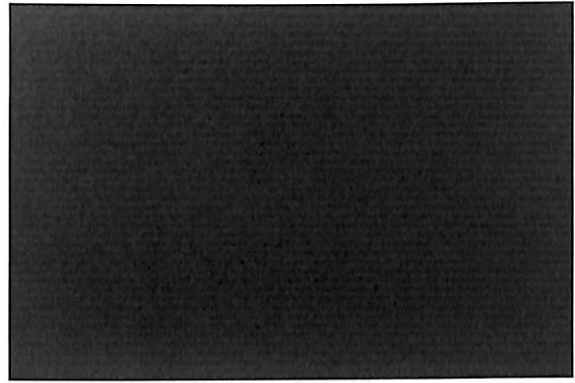


写真14 (1969年)